女學叢誌

驛遞局認可　明治十九年一月二日　每土曜日發兌　第三號

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　續文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第二號目次

●新たまの年のとじめの詞●女子の學科中に割烹の目を加ふべき議（承前）●蝶思花心の慰み（承前）●字母の順序に随て祝賀の詞ばを爲す慰さみ●鳥の巣を買んか●内外雑報●佛國のエリサベッスパアーンの傳●表書小野ゝ通の傳●薄命なる人に新切を盡くすべし●雅言略解●歌の文字の事●圖書（承前）●坐淋圖其他の敷物●化粧のさま●象牙を玳瑁に擬ひ製そる法●御伽草●鶯學梅●周公を夢めむ●机の塵●筆のまゝ●門松の事●をこの辨●つれ〳〵草講義

明治十九年一月二日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區内郵税不申請

本舎ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に内規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ○郵券代用ハ御斷り申上候萬一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割増を乞

郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舎へ御送附可被下候

但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

明治十九年 女學叢誌毎土曜日發兌表

月					
一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎新たまの年のはじめの詞　田嶋任天

初日かげ昇る光りの麗々しく八洲のはての異國も世をあら玉の年とハなりぬ大内山の雲井の御とハ申すもかしこし都鄙の差別なく常磐堅磐の松竹を門邊に根越し浪速津に薫るなる梅一枝を添て君が八千代を祝き己がしゝいはふハ我が大倭の手振よして松ハ貞操を表し竹ハよゝの長きを示し梅ハ王仁が學びの道を傳へ越し紀念にやわらなん衢た〱里々に弘がへる日の御旗ハ注連縄に映じ紙鳶よ繪ける道臣命ハ之を護り申すが如く空に羽をのそ初烏ハ八咫に似。畑つ物海のひろ物の集に集ひて嶋臺よ堆だかき貢物めきて　皇祖が中原を清め給ひて朝賀を受け給ふ橿原の昔しさへ忍ばれ少女が手鞠つき童男が印地うちし大人の神酒に醉て笑き動むさまを見るにつけをはけなくも　天皇尊の御稜威の彌かしこきを思ひ奉るなり今日や今年の始めよして少女諸卿が學びの庭に進みゆき此の蘆原瑞穂の國を彌々秀眞の國細戈千足の國となして浦安の基を立る日と見るからよ思ひ出るまゝ書しるして新たまの年の始めの詞とハなしぬ

いかのぼり鳴をのふしのこゑ〳〵に
君が八千代をはきてまふらん

○女子の學科中よ割烹の目を加ふべき議

〔承前〕　韋涯隱士稿

方今女子敎育の道大に開け其學科も亦た具に備ハる矣然り而るに吾儕が其課目中に割烹の一事なきを遺憾とすると斯の如くなるハ抑も何ぞや夫れ割烹の一事たる小事よ似て極めて大事なり何となれば凡そ人間の此世に棲息する衣食住より緊要なる者ハなく而も中に就て食を以て重しと爲す其食ハ生命を保つ所以。健康を全たふする所以。智慮を發達する所以。國益を興す所以。之を要するに修身齊家富國強兵の大本。一として食に職由かざるハなし古の人曰く食ハ腹に滿れば足ると吾儕の曰く食ハ口に甘く生を養なふに足るを貴としとすと夫れ居常三食をして口に適し生を養なふに足ふしむるハ假令自から手を下さゞるも其夫人をして割烹の方法に熟せしめずんば内政を掌るの一欠所となるを如何せん或ハ曰く割烹の事ハ賤しき業なりコックを傭ひ之に委せば可なり何ぞ夫人を勞させんやと吾儕曰く然らず假令ば富で貴き人。易牙をコックとし日に西洋料理を献立し以て山海の美味を盡そも尙ほ其夫人よして割烹の道に通せバ易牙を指圖して時に料理の原科を變換

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し又は其献立風を改良する等勉て良人の口に適し攝生に心を注ぎ加へんには其利便此上はある可らず況んや中等以下に於てはコックも雇ひ得べからず「バタ」「ミルク」の品類も備設する事かたく僅かに家禽の卵と野菜或は多少の魚類を原料として手製の味噌醬油に調和して所天が不時の需めに備ふると蘇東坡の妻女の如きに至りて若し毫も割烹の方法に心がけなくんば何を以て良人の口に適ふを得べき。攝生のよろしきを得べき。元氣を發達するを得べき。思想を培養するを得べき。勞役に從事するを得べき。不味の食は愈々不味を加へ不幸の生活は益々不幸を極む豈に思はざる可んや而るに其不幸を轉じて幸福をなし不味の食を變じて良味と爲し良人をして攝生を得せしめ其をして精神活發身体健全ならしむるは實に妻女の割烹法を知ると否らずとの間だに在のみ女子たる者學習せずして可ならんや

割烹の目を女子敎課中に加ふる時は其學校に在るの間普通の學藝と共に早く割烹法の一班を識認するを以て其嫁するの後に於て完全なる攝生書割烹書等に就き自ら工夫を用ゐて種々の料理の實驗をも爲し得遂に易牙を欺むくの妙手にも至るべき歟若し天下の女子をして悉く割烹の事を學ばしむる時は隣人の説の如く必らず容貌暴れ肉肥へ下婢一般の趣むきを呈する者と假定するも之を女學の敎課と定むる時は天下の女子皆な悉く容貌暴れ肉肥ゆ豈に隣翁の阿娘のみ一方良媒を失なふの理あるべけんや故に吾儕は大聲して天下の敎育家に申す諸君よろしく余が此說を贊成して女子學課の中に割烹の目を加ふるの議を立られんことを又た更に天下の嚴父慈母に告ぐ願くば其令孃をして割烹を學ばしむるに勇にして夫の妾歌妓輩の不良父母の嘲けりを蒙むり給はざらん事を

◎歐米女學の枝折

○蝶思花心の魁み（承前）　孤月猶風樓重譯

蜻蛉は容ち正しく鳳仙花に向て曰く

夫れ羽蟲族中に在て余は（蜻蛉自から云ふ）何ぞ吾子を歎賞せんや余は全たく識認する能はざる所ろなり抑も汝ぢは諸花中虛飾の一妖嬌にして其性質はなはだ急促殊に一點も芬芳の香匂を帶ることなく又た汝ぢの外に在の所ろの諸花の美麗きに比ぶれば其半ばにも及ばず余は今怒りに乘じて特に此の詞を出すに非ず余が云ふ所ろ皆な眞實にして虛妄なく且や余は汝等の美麗に媚ず又汝等の惠みを受んとも願はず余の飛行するや最とも愛する所の地に緩步して逍遥る狀

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ちを見ハす玆に一小花のあるありて此の香氣を呼吸し得るなり蟲類なんぞ汝の如き虛飾の妖婦を以て愛ずべく味あふべく且つ歎賞すべき者となさんや余に語れ小さしと雖ども智にして且つ謙遜なる紫花地丁よと

紫花地丁ハ之を聞て謂て曰く

夫の蟲類たる者眞實の愛心の何ものたるを能く辨まへ識バ敢て花中の最とも光彩に且つ艶美なるもを求めざるべし凡そ信實懇愛する情致ハ其外貌を論せず人の信ずべからざる所ろに存じて喋々の多辨の之を說くものに非ず然れども虛飾を稱そる者ハ信實なくして根なき所ろより生するものなり夫れ蟲類たる者の見る所ろハ上帝の功德よりも尙は世の名譽を喜こぶの情はなはだ深からん然るに彼の蜜蜂の如きハ極めて奔忙して世經をなす此れ智惠ある者か

以上ハ紫花地丁の說く所なり是より蜜蜂の說話をものすべきなれども此の慰さみの大略ハ右に述る如くあるを以て蜜蜂及び以下諸花諸蟲の說話ハ唯だ讀者諸卿の意に任せんのみ但し此の慰さみハ其遊戲の童男女に益を與ふる大体ハ博く草花羽蟲の名と其性分原質とを知らしむるに在り少女諸卿此の遊戲を爲し遂んと欲し給ハバ豫じめ諸花群蟲の名と如何なる体裁にして如何なる擧動を爲す者かを會得し相對して說話するの趣向を玩味講究し置き給へかし

〔完〕

○字母の順序に隨て祝賀の詞ばを爲す慰さみ

此の慰さみハ少女をして高尙なる語又ハ大人の用ふる緊要の語を早く覺へ悟らしむる慰さみにして頗ふる有益なる遊びと爲す其方法ハ假令ば玆に六人の少女ありと假定して一人の少女まづいちと云ふに向つて妾しハ汝を愛そ如何となれ〔イ〕汝ハいつくしむべき情實あるを以てなり〔是れより名の頭字に關せす次々に向ひ〕〔ロ〕汝も愛すべし如何となればろくを賜はると聞ばなり〔ハ〕汝もまた愛すべし如何となれバはなやかなる容色あればなり〔ニ〕汝ハにしきの帶びしめるが故に亦た然り〔ホ〕汝ハほそこしに牡丹の摸樣ある衣裝して書籍を讀む事を好むが故に最とも愛そるに足れり〔ヘ〕汝ハへりくだる事にて評判よろしきを以てなりと

以上の如くいろはの結末の文字の盡るまで漸次に進むべし而して〔へ〕にて其數了らば次の話說する者其隣席なる少女の名の頭字を取り豫じめ話說の問題を定め其問題戰記の又ハ歷史にして其少女の名きよ又きんなれバきよ盛ハ帝を腦ませし惡人なり〔ユ〕夢に名臣を得しハ後醍醐天皇なり〔メ〕明治一新ハ慶

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

應四年の末ニ成れりと順次に進み若し字母ニ當りて詞ば出ず躊躇するとあれば罰を受る者と爲し又話說の始めに他の名の頭字を誤まらば同じく罰を受ると爲す

○鳥の巣を買んの

此の慰さみハ諸物品の利用性質を覺ふるに必用の遊戲なり之を做にハ假令ば玆に少女あり室内を一回して他の少女に向ひ誰が妾の鳥の巣を買んやと云ふ〔但し實に鳥の巣あるに非ず詞バの上のみなり〕他の之を買んと欲する者答へて我れ之を買んと巣を賣る者又た問ふ汝何を以て買んと欲するかと是時の答詞種々おなじからず卽ハち稻藁を以て買んと云ひ菓子にて求んと云ひ或ハ裂にて購なハんと衆童女其の鳥の巣を得んが爲め之に給與せんと欲する者を語り了りて後ち巣を賣る者衆童女に對して疑問を質すの權あり他の少女之に答ふるの際必らず笑ふヿを禁ず若し之を犯せば罰を蒙むる者とぞ而して此の疑問を爲すハ務めて滑稽たる事を以てし人をして笑倒せしむるを肝要とす然れども其問たる鳥の巣に關するヿの若くハ給與品に係る事を以てすべし卽ハち其用語を擧て示さんに問て曰く汝ハ稻藁を以て何事を爲すの答て曰く妾ハ之を以て水珠を吹に用ゐんか之を以て夏帽子を製ためにに爲んの或ハ之を以て幻法師の杖に作らんの又ハ疊の臺米俵など總て其利用を示すべきなり

◎内外雜報

○明治女學校　同校ハ開業以來日尙ほ淺しと雖も生徒の學業ハ大に進歩し英學課生徒中にハ英人と差支なく對話なし得るもあり去暮十二月十九日冬期の試驗終りたりるが同日イーストレーキ夫人其他の演說講話等を有りたりといふ

○雅樂所　牛込門内なる雅樂所ハ工事中の所去暮全く落成を告げたれバ去る十二月廿二日より雅樂部と改稱になりたり

○訓盲啞院　築地の訓盲啞院ハ昨年十二月廿五日限り授業を終られしが本年ハ一月十六日より授業始を爲す由又平山文部權少書記官ハ去る十二月廿六日午前九時同院に出頭ありて同院長高須柏樹氏に面晤し入院生徒休暇中自宅に歸宿せしむる事等につき種々教育上の利害を協議有りたりしが結局歸宿を許すときハ自然に父兄子弟の情愛よりして我儘を生じ教育等閑に流るゝ恐れあれバ歸宅ハ許されざる方に決したりと

○レースの製造　東京府の所轄なるレース製造所ハ從來制造の迅速を要する所より製造方自然粒惡に流れ爲めニ物品の聲價を落す事なしとせざるより今般右製造の時間を延ばして精

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

々綿密に製造せしむる事等に相成りたるよし

○菖蒲屋和佐之助　昨年十二月も極〻押詰りて明日ハ大晦日明々日ハ元日といふいとも多忙しき師走の空余所の見る目も羨ましき浮世離れし草の屋わり南ゑ向ひし窓にハ室咲の梅馥郁と馨りぬぐひ縁にハ福壽草の一輪今將に開かんとそ爪琴の音もいと床しくまだ暮ながら春は只此家ゑのみ來りし如き住居ハ是れ何者ぞといふゑ先年諸方の寄席にて若衆姿で現ハれし美貌と妙音との誉れ高き菖蒲屋和佐之助が稼ぎ溜たる金を持ち今ハ品川東海寺の境内に隠れ棲み閑静を樂しむ庵なりとそ藝人社會にして斯の如きハ之を固くるしく譽れハ實に鐵中の錚々とや云ハん

○ランプの心　廢れて去まふ物をどうにの工夫して用に立つるハ世の中の大なる益なり高輪南町の大草氏の宅にて或夜ランプの心に事を欠き深更なれど買ひにやるも面倒ありと木綿の切にて心を作りて代用しさるに油の吸込工合光りの度迄唐物屋で買ふランプ心と少も變る事なければ同氏ハ是れを一ケ年間試し用ひいよ〳〵功用わるを知られしと云が夫れハ只廢れたる木綿の切屑をランプ心の通りに縫ひて用ひるにて一個につき一ケ年五六錢の費を省くと云へば皆樣試して御覧わるべし

○華族女學校　同學校ハ去年の廿五日を以て十八年の授業納めをせられしと云ふ

○盲唖ならざる人に告ぐ　盲唖といへども其精神に至りてハ常人に異なるとなし故に之を導ひき教ふれば何事も成就すると吾人に同し已ゑ客年築地の訓盲唖院にて三日間生徒の試驗をなせしに書畫裁縫の業より文學算術鍼治琴までも皆よく熟し常人をして舌を卷し光たり盲唖といへど勉強それバ斯の如し盲唖ならざる人々よく心ろし給へかし

○大全女用文姫鏡　弊社の客員田嶋任天氏の著ハされたる題號の書ハ少女諸卿が智旨徳育の爲に頗ふる益ある者にて何くれとなく記載せられされバ數百冊の書に優れるとや申すべけれ

○小笠原島新はりの記　黒河春村大人のものせる小笠原嶋開墾記を去年の十二月十五日刊行の東京日日新聞に記載せられされば玆ゑ載はべりぬ

○小笠原嶋新とりの記

伊豆の西に八丈の嶋の南北緯二十七度と〻のへのとやとのひんのし四度二十七分にわたりてひろきせときろくはくの嶋わ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りしを東照らす神おやのおんとき文祿の二とせといふに小笠原氏部少輔貞頼みゆるしかうむりてわたりそめしより此嶋永くえるしとて小笠原嶋といふ名をもたまひたりけりされど波路のいとわらけれはまやありけんいつしのわたりかよふ事もなくなりまけりしを其後亨保十二年にの貞頼の後なりける宮内貞任さふに申こひて亦さらに渡りたりしかどろのころはおほやけさまにもおんこともさしけくやおはしけんさしてきはくしきこさためもあらてなむやミにしろもく かゝるはなれ島にあれどもゝとよりひとのくにしもあらぬをいたつらよすくのみはらんには風波はけしきわたつみをゆきかふ船路のたよりもよろしからざれはいかで此度はおこたることなく新はりせよとおきてさせ給ひて水野筑後守忠徳のぬし服部歸一常純のぬしらに此事のれはくつかさとせ給ひぬえのあるによりて此みつのひの人にさるやんことなき仰ことをかしこみいとミやうに船よそひしてやかてともつなをとのれんとなりかゝれは此こといとなませ給ふためしを沖津嶋根の石まきさミてとこしなへにとゞめたまひつたへたまはんとあることのよしを文久元年十二月のはしめまかしこまりうけたまはりて

黒河主永春村しるそ

◎内外烈女傳

○佛國のエリサベツ、パアノンの傳

孝心は貞操の淵なり是よりして名譽を潔ぎよき行ひ沸出可し

輕く羅袖を提げて斜めに面を掩ひ淺く蛾眉を瘞めて半ば愁を帯ぶ幾度か門を出て人を待が如く幾度の時計を指折りて心狂ひしま似たり花晩園に開くもこれを顧みるの暇なく月東山よ上るも亦知らざるに似たり此少女ぞ是た何者ぞこわ是れ佛國の孝女エリサベッスなり徃昔一千七百八十九年（日本天明寛政の頃徳川家齊公の時）佛國に革命の大乱起りしときは一國恰かも麻の如く荷そめにも王家に力を添るの疑ひあるものわ上皇族大臣を問れず下士民の論なく悉く捕へて死刑に行なひけるとなん。都パリーの景況は昨日に變る今日の空秋ならなくも寂莫と只時々に聞ゆるは街の四辻に首を斬る彼のギヨッチンの音のみなり茲にエリサベッスパアーンの父は日頃王家を思ふ忠誠なる人まて有しが獨り世の乱れゆきて暴人の處々に蔓延り今は早王家そら敵しがたく皇帝もまた共和黨の爲に殺逆ま逢ひ泰りしと聞き憂憤堪へ難く戸を閉て亦外ま出でず獨り噴りの眦を耐へて居しか何者の冤言なりけんエリサベッスの父は勤王黨な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

りを目指され時を移さず共和黨の爲に捕縛に逢ひ證據の書類と共に糺問所に曳行かれたり。エリサベツスは此を見て悲歎に沈み如何なる災難にて此憂目に逢ひ給ひつるぞと身悶へして憂ひしが亦つく〲と思ふやう此は必らず人違の寃罪ならん父は法律に觸るヿが如き罪科を犯せし事のあらざるは子たるの妾が信じて疑はざる所なり明日は免され給ふらん歎かじものをと思へどもさすがに物の思はれて前に述たる如く或ひは時計の針の進むを數へ或ひは門外に出でゝ人の噂噺をば聞しあらん。偖てエリサベツスの父は糺問所に曳れ行きて訊問をば受始めたりしが始めの程は勤王黨にあらざる旨を言張り斷平として動かざりしが持去られ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

たる書籍の中に時の大臣に捧呈たる一の封事の草稿有るを見出され今ハ早辨解くすべもあら悲し罪人とハ定められ死刑の宣告をば申し渡されけりエリサベッスハ父の還りの程を今の〳〵と待たりしに甚遅けれバ胸安からず此處彼處と問ひ合せ便を得れば此ハ如何に死刑の宣告を受たりと聞き魂消る斗りに驚嘆し此は何事にて然るやと糺問所の門ゑ詣り死刑の罪の次第をば聴かせ玉へと俯伏してひたふる願ひ歎きしに慈悲も情も荒磯に生立ちたりし松の如かとこぶ〳〵しき兵士等の耳にハ却てさからひて聴入る者も更になく只苦〳〵しく叱りてらされエリサベッスは途方の涙に暮れ暫らく門の閾石に氣息を絶へて居たりしが葉末の露の口ゑ入り漸々吾ゑ立ち返り只しほ〳〵と打歎き家路に歸る道すがら心の中に思ふ樣。一目なりとも吾父に逢まいらする手術にハ兵士等に賄賂を贈るゑ如くことあらじ左なり左なりと思ひ立ち我財産を傾けて多少の金を調へつ密のゑ兵士に與へしに思ひし如く事成りて父が罪科を徴へら此囹圄に至り逢ふことを許されしかバエリサベッスハ天へも上る心地して憂比の中に喜ひつ靴の進も急々と囹圄の門に早や至りぬ 以下次號

○表書傳 三

小野お通の傳 幷 淨瑠璃の濫觴

淨瑠璃語といふ事ハ古ハなき物なり葵草繁り初にし徳川の三四代の頃よりして世に玩弄すことゝハなりにき其が唄ひを語り初し人ハ小野お通となん呼べる微妙き才女のよし物の本ゑも見へ侍れど其れ通は如何なる人にて如何なる世渡りをなせしかの履歴に至りてハ朦朧として春の夜の月をながむるが如く遺憾しく思ひたりしが此頃ふと見聞草てふ大部の隨筆を閲せしにいと懇に書留て有ゑき再寫して世の好事家に示し參らす於通は播州網干の生にて池田輝政の家臣垣川喜太郎某の妻となり女子一人有しが後に離別となれり於通は才智發明なるに夫喜太郎ハ不肖により恥辱のみ多かりし故離別せりとかや其後お通ハ後光明院の女御新上東門院に宮仕し崩御の後ち天樹院の御介添となり後亦東福門院に召仕るハ女徳ありて能書其他百般の技藝に長せしとかや後年江戸に來りて百人扶持二百金を賜ふ彼の女子も成長し後奇量勝ぐれ才藝多く母と同じく禁中に在りし對眞田伊豆守信幸の嫡男内記信昌寛永三年御上洛の供奉して上京の折柄此女子と密通し後男子を生めり後年召出されて眞田勘解田景信といふ今の眞田伊豆守幸通が庶兄なり於通江戸に在りて春日の局と懇意なるゑより局の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

盡力にて稻葉美濃守正則執成し申し召されて三千石を信景に給ふ其男ハ今の出羽守信弘なり此女子後母と共に江戸に來り琴の上手なりしかば千代姫君の御師範となりて尾張家に仕しとなり　以上玉露澄話　お通後尼となり淨閑尼といふ東福門院の仰に由り淨瑠璃御前の事を十二段に作り戸田左門一西抱の盲人保住檢校景を唄ふ其後は誰人の事にても其節をおべて淨瑠璃とは言慣はせり　以上加賀美近潸の隨筆　吾儕れ通の織田右府に仕しといふに疑を抱き猶は貞丈雜記の太閤秀吉公の御臺所に召使われし云云を不審しく思ひをりしが見聞草を見るに及んで暗鬼頓に跡を滅せり　千束の里　みさを寄送

薄命なる人に親切を盡くすべし

米國人コウドレイ氏のモラルレッスンスト（書名）に薄命なる一少女の話を擧て曰く玆にイミリー、ボステルといふ一少女あり冬月嚴寒の朝學校に赴むかんとし母に謂て曰く私ハ此外の清楚なる衣服を着せんことを欲そるなり昨日同學の小女等此の衣に補綴あるを見て大に嘲り笑へり殊にシコリア、ハブンと云へる少女は私を詰りて汝は何れの襤褸商より此の衣を買ひたりやと申せり此の時母ハ兩眼に淚を浮かべ默然として語無りしが暫らくして曰く從來我が此家ハ富み榮ゑたりしが兩三年前主人の死せしより家產日に衰ろへ遂に今日の困窮に至りしなりと咽びく語りたり元來此少女イミリーハ此家の長女にして今年八歳其の他に二人の弟有りて母ハ終日裁縫を業とし纔に母子四人の生計を營なみをる者にして少女イミリーも學校より歸れば直ちに母を扶けて勞働も時としてハ飢餓に迫らんとすることあり況んや其衣服の如きに至りてハ僅に寒を避くるのみにして他の少女の如く清楚なる衣服を着すること能ハざるなり夫れ此の如き貧窮の際に當り少女を學校に出し教育せしめんとする其母の心中實に察するに余りあり然るにイシリーが襤褸を着せるを笑ひしハ實に人情に戻ると謂ふべし其母之を聞きて悲痛に堪へざれども其色を顯ハさず語を次ぎ徐ろに曰く余が愛女に汝の衣服ハ襤褸にあらず一點裂なしと其時少女イミーリ曰く母に私も又裂けること無を知れり然れども他人の笑ふ所以ハ補綴あるを以てなり私ハ昨日笑われし故已に泣のんとせり母の曰く汝補綴ある衣服を着するも他人の關する所にあらず此衣ハ母汝が爲に裁縫せし最良の衣服なりイミリー曰く私も又能く是れを知れり故に私ハ他の少女の笑ふを厭ハずして勉强それども時としてハ竊に不快を覺ゆるのみと其の時一婦人の裁縫を嘱まんとして入り來れり因り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て談話も亦止めたり噫無情童子は窮困人を見て之を罵り之を笑ひ薄命の人をして更に一層の不快を覺えしむるなり

○女學

○雅言略解

〔い〕いさゝめ　假初のこと○いましば　いまれと云ふ詞にし文字を添しなり又今暫なり○いで　發語の詞又請心の義とも云ふ又さてもと云ふ心に合ふ歌もあり○いとなき　暇なき○いつれとれ　いつにも文字を添し也○いとせめて　いとは最せめてはせめてのことゝ也○いなせ　否とも應とものゝ心○いのちにむかふ　命に等しき也むかふは對の字を書り○いさに　萬葉集にひらすと云り○いそふ　爭ふ也○いやとしのは　としのはゝ年毎又只年と云意いやは彌なり○いつさいるさ　出さま入さま○いたつき　いたつかはしき也。勞の字を書り○いきの結　命なり○いともかしこし　最賢　又最も添けなき意○いなふね　のぼればくだるいなふねと讀るは最上川水はやくして舟を引のぼすに舟のへさきの緩くして人の否とてかぶりを振に似たれば云なり○いろたへのて　萬葉に好色物とあり○いづのちわき　威勢の強なり○いへばえに　云んとすれば得も云れぬる也○いさなゝ　いさゝめと同し聊かの意○いちしるく　著明也○いたてに走れ　射楯に走れ　汽船などの早く行に用ゆ○いさをし　勳功

〔は〕はなのゑまひ　笑の意。花の樣よ美しく笑ふと○はたれ心　取とめなき心○はるのせき　留春不用關城固と云より出たり○はた　將の字。詞の助なり。今はた同じの類○はたら心はたれ心に同じ○はるの野をかへす　蕨をはる也○はたさすこま　貢物負ふ馬には記して旗を指が故よ云ふ○はつみゆき　初大雪○はやくのと　疾の事○

〔に〕にへや　美しきと○にゝいつ　二四八と書き正しく聞とも初めて聞とものゝ意○にひはり　新墾新田を開くと○にしきのやひもとく花　花の樣が錦の紐とさし風情と云ふ意。やれ捨るや也○

〔以下次號〕

○歌の文字の事

歌の文字は㪍上古は長短さだまらず八雲の神詠より以來三十一字に定まりて歌の調のひよろしきに合へり故に今にても調のひの悪きは成たけ避べき事なり．

○歌の文字いたれるべき事　五句三十一字の内一字にてもあしき文字あれば一首の調を損ずるなり八雲口傳に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

われがミれとかへる鷹となりにけり年ハ經とも戀ハ忘れず

此歌上の五文字なくてあらばやと昔しより云り所詮われが一二字あしきなり。わかみハとへる鷹と云たらんにハ難あるまじきを夫にてハ文字たらぬ故われがと云るにて調あしざまに聞へり古歌にてさへ斯の如し當時の歌にハ多き事あり熟々心ろすべき事にてそ

○字の餘りて聞ゆると云ふ事　二條中將雅經談に歌にハ此文字なくもがなと思はゆる事のあるなり兼實と云ものゝ歌に

月ハ知やうき世の中のはかなきをながめても又幾めぐりとハ。是ハよろしく讀る歌なれどもよの中の中といふ字いみじくわろきなり。

○字餘りの事　八雲口傳に文字ハさせる用なく餘さでもやすくあるべからん所にわざと巧いれて餘すとハわろし如何にも餘りてハかなふまじく。餘りても聞にくからぬに幾字もくるしからず

年ふれば齡ハ老ぬしかハあれど花をしみれば物思ひもなく

ほの〴〵と有明の月の月かげに紅葉ふきおろす山卸のかぜ

此歌どもハ熟も優たる歌なれバ字餘りたるによりて悪くなるべきに非ず。しなしやうのてすらなる故に聞にくきなり云々

又

有磯海の浪間かき分てかつぐ海士のいきもつきあへず物をこそ思へ是ハ卅六字あれども。よく餘りたるもえ餘りたるやうにも聞へず悪き字餘りハ一字あまりても耳にたつなり。玄旨法印曰く字餘りて面白きハ左右に及ばず。よしなき時に長高く見せんが爲に好て餘す人ありいかにぞや是を中飽病と戒めたり

◎女紅

○圖畫〔承前〕

凡そ圖畫せんとするにハ先づ畫筆〔鉛筆にても又ハ毛筆にても〕の鋒より一インチ〔我が八分三厘余〕あまりの處にて之を握るべし其ハ餘り筆鋒の處ろを握れば自然と紙に近づきて運筆自在ならざるが故なり又畫稿ハ紙の左りに置き而して其畫き出す所ろ紙の最高より描下すべし是ハ常に右の手が紙の上を蔽ふが故に其畫きたる所の磨滅る怖れを避ると且つ眼の容易に全紙を通觀し得んとを欲せばなり。偖て外形を畫くにハ必らず確實明白にして且つ截斷ところの少なきに注意するを肝要とす然れども其の接續が境の樹木の側より畫き始めし如く見る線より出來する所ろの外貌ハ成たけ粗悪にして眞黒に

四十五

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にならざる樣心を用ふべし然らざれバ觀るに足らざる物となるべし又圖畫するにハ先づ其畫ところの位置の距離と且つ比例を計ることを習慣となす可らず。よろしく最初に畫稿をなし而して後に善く注意して其の圖畫の精細なる所に至るべし。垂線ハ必らず眞直に斜の線ハ必らず確實にして且つ明白にするを要すべし又畫稿を造るとハ頗ふる手練て敏捷になり殊に精細に至るまでハ必らず光線の蔭を塗んことを務む可らず又はじめ圖畫するにハ成たけ左右に在る所ろの物体を手本として圖畫すべし是ハ空想の物体を徒づらに摸せバ眞の畫を造るに往々差支を生すれバなり故に自然目に觸る物体より始めて容易畫稿の成就するを欲すべし

光線の蔭影を塗飾ハ必らず完全なる畫本に就て學バざる可らずと雖ども今其一二を云んに常に筆鋒をして濶大ならしめ唯だ兩三圖にて能く數多の用をなさんことを務むべし。〔且つ又た其塗飾る所ろの全たく深黑ならざる所ろ出來るとも再たび同じ筆を以て同し方に向て之を塗飾べからず是れ却つて其圖畫を汚穢さんことを怖るればなり〕然る後に更に輕くして小さき畫事にて最初に造りし所の畫面に對し少しく傾むく所の畫を作るべし當に塗べき所ろに於てハ宜しく畫く所ろの物をして濶大平坦にして互に相駢列して一も混雜することなく且つ各々の順序あらしむべし

〔以下次號〕

○坐浦團其他の敷物

坐浦團又ハ針箱の敷物などに用ゐる小さき敷物類ハ甚だ容易且つ極めて華麗に製することを得る者なり此の製造ハ帆木綿と羅紗の撚絲にて作る所にして其縫着に種々の方法あれども大低ハ本誌一號に記せしベルリン、ウオルクと同じ其一ハ物の標號を縫ふ形狀に擬ひて繡飾し其二ハ敷物の眞中に花又ハ菓實鳥などの形狀を繡飾し其他の間際ハ盡く同じ色澤ならしめ之を地と倣に在り又一法ハ斜の線方形條或ハ雁行に繡飾するに在り此の法を用ゐるにハ其絲を両色となせば一段の美觀を添る者と知るべし而して是等の色合ハ互に相反對する色を撰むを佳とす譬へば紫に黃。黑赤色橙色に黃赤色に藍。深紅色に黑色等の如き是なり又其緣ハ他の色糸を以て細かに耳を縫伏れば始めて出來あがると知るべし

○化裝のまき

〔脊の高さを低く見せる事〕 脊の高さハスラリと見へて風俗よしと雖ども人并より高き時ハ目立て耻かしが故にや脊高人ハ無理に脊を低く見せんとて腰をかゞめ足の爪先にて歩行も

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ゑ生れも附ぬ猫脊よなりて脊の高きよりハ却て見苦しき風に見ゆるなり斯の如き人を人並の脊に見せんとならば身体の備へを整として脇を低く結び踵にて歩行く心持よすべし少しハ低く見ゆる者なり爪先にて歩行と踵にて歩行とハ餘程脊の高低よ關るものなり衣類ハ摸様なれば横に多く付たる摸様。縞なれば横の勝たる縞がよし帯も少し平たくし結び目ハ手先ながくするがよし

○象牙を玳瑁に擬ひ製する法

象牙の櫛簪笄を玳瑁に擬製すれば馬爪朝鮮などよりも品よく光澤もまた眞の玳瑁に異あらずして如何見るも眞物と見らるゝなり之を擬製する法ハ鹽酸一分に水八分或ハ十分を容て之を和し象牙の櫛簪笄を其中よ浸すと四五日又ハ一週間なれば象牙中に含む土質溶け去り柔軟なる質となる而る後ち之を桝の皮の煮汁に浸せば玳瑁と同質になり

◎群芳詞苑

○魁梅　　淺草　田中よし子　八年二ヶ月

ふるとしの心ちそれども梅の花にはふハ春のしるしなりけり

○埋火　　埼玉　戸田とし子　十三年六ヶ月

夜もすから友とぞ賴む埋火のきへてわけもくわかつきのかね

○餘寒　　千束村　ミさ子

山房春冷晝漆々。濁酒傾來不作功。花信柳情猶寂寞。風吹殘雪打簾櫳。

○春日郊行　　群馬　山田かう子　十四年三ヶ月

柳眼如眠舞袖輕。絳霞深處聞倉庚。東風今日促紅錠。耐想晩春戾舊情。

○年の始によめる　　うた子　八十媼

としをふるとハ思ハず春くれば人よりさきよられしかりけり

○梅香告春　　東京　中嶋ろく子

朝ひこのさすかた枝よりさき出てまづ春つぐるやどの梅が香

○野鶯　　靜岡　宮田きん子

きへあへぬ野面せの庵のもきをしもはなと先でゝや鶯のなく

○山家の春　　同　増田しげ子

梅が香のよほハざりせば山ざとの春てふとハいかでしらまし

○元旦試筆　　澤　ます子

朝ひのかげさすや氷のとけそめてむかふ硯りのうみものどけし

○早春　　田邊はる子

春來ても野すへの雪の消ぬまハなほふる年の心ちこそすれ

○早春雜詠　　山崎とき子　三十年三ヶ月

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

わか宿の庭におされるむらすゞめ永はる日を千代となくなり

○御伽草

●鶯宿梅

天暦の帝の頃とかや清凉殿前の梅樹枯れければ其頃紀の貫之が庭の梅を移し植ゆべしと勅詔ありしに貫之の娘深く之れを惜みて

勅なればいともかしこし鶯の宿ハと問ハゞ如何こたへん

とよみて枝の間にさしハさみ奉りしのハ帝あわれませ給ひて此梅を鶯宿梅とハ名け給ひしよしこハ皇國の風雅なれど漢土にも同じ樣なる事あり處も名もおぼろげなれど。ある山中に隱居せし某といふ人ありしが其人の庭に凡そ三百年も經たらんと思はるゝ計りの古松あり時の縣令之れを伐りて用材になさまく欲せしかバ某いたく是を惜みて

大夫去作棟梁材　無復清蔭護緑苔　今夜月明風露冷
誤他雲外鶴歸來

縣令之れを讀みて悵然として伐ることを止めしと和漢駢事に載せ侍れり女子ハすべて貫之の娘の如く有度きものにこそ

周公を夢めむ

一師晝寢す弟子之れを詰めて曰く先生何事をか爲すと師謬りて曰く我卽ハち周公を夢めむと其弟子亦之れに效ふて明日晝寢す師來りて戒棒を以て撃ち醒まして曰く汝何をかそると弟子之れに答へて曰く亦周公を夢みるのみと師の曰ハく周公汝に何事を語ると弟子曰く周公昨日先生に御目よのふらぬと師默然たり

西洋隱語

此に物あり此物ハ時として長短あり正斜あり常に宴遊に從がひ亦舞蹈に伴なわれ始終相離れずと雖も決して提ふるべからず捉ふべからずと雖も正しき名を持ちて證據となることと有り〔影〕

仝

余ハ顏面の中よ両手あり余ハ此の両手を以て常よ運動せり余若し運動を斷つときハ世界の人の迷惑することと中々非常なるべし〔時計〕

◎机の塵

◎筆のまよく

○門松の事　千束の里　みきを

故を温ね新らしき年の始のこと祝ぎに門松てふおとの起原を採り見んと種々の書ひもときしに皆春の夜の月の如おぼろげ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にていとゞ迷ひ侍りき世諺問答にハ曰く松竹の青々と長へよ色變へぬ故に孟春これを臣民の門戸に立つと書記し藤原ノ爲尹卿の立春の歌を引き

今朝ハまた都の手ぶり引かへてちひろのそしめ賤か門松

國朝佳節錄に松下見林大人の述べら然しも同じ様にてただ禮記月令の集說を引かれしのみ

○舞蹈の辨　同じく

舞蹈とハ原と禮儀のことにして今いふ舞ひ踏りのことにてハ侍らじ二字を離して別よ義をとれバ舞い踏りあれど古より熟字して禮儀の名に用ひ來れり去き書讀人ハ心したまへ偖其事の書に見へしハ續日本後記十一に弘仁九年詔書あり天下の儀式男女の衣服皆唐法よ依る五位巳上の位記改めて漢様に從ふ諸の宮殿院堂門閣皆新額を著く又百官の舞蹈を肄ハしむ此の如くして朝儀並びよ闕り說くことを得たり云云又其所作は拾芥抄に曰く舞蹈の事ハ再拜して笏を置き立て右左左居て左右左笏を取り小揖し立て再拜す　北山記にハ曰く再拜し次に左右左立次に左右左居揖して後立て拜し次よ小揖す大略此の如し又大嘗會具釋てふ書にハ曰く拜舞は再拜舞蹈するなり再拜ハ本より拜謝の義舞踏は欣躍の義にて手の舞ひ足の踏を知らざる意なり其儀先づ立て笏に兩の手を掛て再拜し次よ居て再拜し次に笏を右の傍に置て立て左右左に舞ひ次に居て左右左よ舞ひ次よ笏を把り立て初の如く再拜すいつとても拜舞の儀ハ此の如しといへり源氏物語其他の雙紙にもぶたふと。かんなもて書けり其心して讀たまへ西洋連舞ハ只舞ひ蹈るといふ義を取りて名けゝるなり

○をこの辨　同じく

貝原好古の諺草を閱せしよ曰く俗言に。をこのもの。をこがましなどとて。人を嘲り笑にいふ言葉は徒然草に。をこのましくよもあらじなど云もせんなければ。又源氏蓬生の卷に人たのへしてハ。をこならんとのたまふ。など見へたり野槌（徒然草を注せし書）にいふをこを鳴呼と書りおかしきと云ふ義なり或說にハ鳴呼本烏滸の字なり烏滸ハ國の名にして其俗愚通變なき故云云滸の者といふとかや好古案づるに此說非なり日本紀第十仁德天皇の御歌に于古とあれバ本邦上代よりの言葉なり烏滸の國のことを取りていふにあらずと最とねもごろにしるされ侍れど。おのれみさを亦考ふるよあながちに大和言葉とのみハ言れじ石の上ふりし徃古ハ韓倭の差別なく往通ひ言の葉も自から彼れ是れと混合らひしハ彼の素戔烏尊の韓國に徃きし事

四十九

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或る說には素戔烏を韓語とし亦朝鮮の大祖檀君王儉とす 亦天日槍の上古に歸化せし事黒川眞頼大人の博物叢書に詳なり 其他我國に雅言とし弄びをる言葉よ印度語多く 猿をましら斑をまだら隨意をまに〳〵の如き皆梵語なり 韃靼語の混りをる以て考ふるに往古はなべて痴者を〻ことは呼びしなるべし。後漢書列傳七十六 南蠻傳よは其俗の奇しき行を擧げて國の名とし老學庵筆記の說はそこし反對なれど其言葉のありしは疑ふべきにあらず 大鷦鷯仁德の御世に後漢書の渡るべうもあらねど烏許の名たることを知るよしあらじ故に暗合せしにあらねば必らず上古の人の通り言葉なるべし代下りては。か〻る例し少なきにあらずかし

◎つれ〳〵草講義

任天居士

ひたふるの世捨人は中々あらまほしきかたも有ならん。人は形ありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ。ものうちいひたる聞にくからずあひきやう有て言葉なほからぬこそあかずむかはまほしけれ

●ひたふる　只箇の義なり一向の意よ解するも可なり●世捨人　四十二章經よ佛言辭親出家識心達本解無爲法名曰沙門是を世捨人と云ふ出世間の義●ものうちいひたる　物打云ひたる●あひきやう　愛敬の字●むかはまほしけれ　此に意を差むけるの義

めでたしと見る人の心おとりせらる〻本性見へんこそ口おしかるべけれ。しなかたちこそ生れつきたらめ。心はなどか賢より賢にうつさばうつらざらん

●めでたし　愛痛の字義はめたる詞にて心の尊貴美麗を云なり●おとり　劣なり●本性　本性とは法性を云ふ元より寂靜無爲にして着附ところなきなり然るよ目に見耳に觸る事物よ制せらる〻が故に種々に變りて心ろ劣りの本となるなり●しなかたちこそ生れつきたらめ　外形こそ生れつきなり心は聖人も凡夫も一なり本性の解と合せ會得すべし●かしこきより　賢々易色の義にて賢こき人を手本として之に移と云ふ意●

形心ざまよき人も。ざえなくなりぬれば。しなくだり。かほにくさげなる人にも立まじりて。かけすげにさる〻こそほいなきわざなれ。ありたき事は。まとしき文の道作文和歌管絃の道。又有職に公事のかた。人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからずはしりかき聲おかしくて柏子とりいたましうするものから。げこならぬこそをのこはよけれ

◎正誤

つれ〳〵草○二行メかくハかた四行メ口なしハ口をし○増賀ひ〳〵ま〻り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

華族女學校總裁下田歌子先生訓歌
任天田嶋象二著編

貴女至寶 大全女用文姫鏡

木版大本全二冊
精彫圖畫彩色入
正價金六十五錢

此書ハ上卷に両皇后の宮の御尊影を掲げ奉り次に婦人品位の繪畫名所圖畫三十六烈女圖傳百人一首女禮式を始めとして教育編化粧の卷歌學裁縫學苟くも女學女紅に關係ある者ハ漏さず之を網羅し其件數百に達し且つ悉く之に繪畫を挿入し下卷よハ新体の女用文并よ熟語を毎文章の末段に塡め以て作文に容易ならしめ贅頭にハ貴女諸卿が坐右に於て日用欠く可らざる家事經濟編より育兒法まで掲けたれバ實よ數百冊の女學女紅書を兼有する近世無双の女子寶典よして真に日本女鏡に背かさる良書なり冀くば購讀して廣告文の誣言よあらさるを知り給ふべし
且ツ愛讀諸君の便を圖り豫約低價法に倣ひ特別非常の廉價を以て十九年三月十五日迄貳千五百部を限り廣發賣せんとす尤御購求の多少を論せず出板せしものなれバ御送金の順序を以て御送本可仕候

東京日本橋區西河岸町
十二番地畏三堂書肆
須原鐵二

中村敬宇先生序　湯目北水先生編纂
○歐米女權　全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

成嶋柳北先生序　副島種臣先生閲　曾根俊虎著
○清國漫遊誌　正價金四拾五錢　郵税自便

東條竹翠著　繪入かなつき
○婦女庭訓の眞鏡　全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

七條峯太郎編輯　鼇頭作文要用字類　和製中本全壹冊
女子必携 ○女子作文楷梯　定價金貳拾貳錢　郵便税四錢

滑稽新話 ○明治流行うそ八百　壹冊正價二十錢　郵税四錢
此書ハ能く明治の人情を穿ちたる奇にして妙と云ハさるを得さる滑稽本なり下編ハ上編より一層の珍奇あり

漢馬融撰　日本佐藤楳先生旁釋
○忠經旁釋　木板手刷　正價拾錢　郵税四錢

○明治英名傳　正價 郵税共金三十錢

人命保險 ○人間長壽法　正價郵税共三拾錢
右ハ表題の如く人間の長壽する法なり藥を呑んで寢てゐる事と早や死にする事の御嫌ひの方ハ求め賜へ

○東京高名鑑　正價 郵税共二十五錢
此書ハ府會議員、區會議員、新聞記者、演説者、詩文書畫の先生、代言人、等を掲載したる重寳の本なり

○古今百馬鹿　正價金二十錢　郵税金四錢

○滑稽水掛論　正價金拾八錢　郵税金四錢
此書ハ世に四國屋猿松、百内屋扱作、大破家三太郎、惣領の甚六なる四者あり互に議論百出其一議一論實に笑を止むる事を知らざる滑稽本なり

一右書籍の外逐次出板書籍廣告仕候間續々御注文を乞ふ

千葉師範學校體操教師馬場壽先生著
訂正増補 ○小學徒手體操新書　第二版　美本全一冊　定價八錢　郵税二錢

馬場壽先生著
○啞鈴體操新法　美本全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

小學生徒 美容術　全一冊定價金六錢郵税二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

馬場壽先生著
訂正增補小學徒手体操新書圖解
定價金六錢
郵便税二錢

農學士菊地熊太郎編述
○化學理論一班 全一册
定價金二十錢
郵便税金六錢

嶋津倉治編輯
○明治新刻日本溫古類聚 全壹册
定價金三十錢
郵便税金六錢

小池民次序
馬場壽著
新撰小學遊戲書 全一册
洋本仕立小本 挿密圖
定價金拾五錢郵税金四錢

千葉本町壹丁目
立眞本舍

東京大賣捌所
績文舍

新版豫約廣告

米國パーリー氏原著 戸代光大先生譯述

容易獨修 萬國史直譯

亞細亞亞非利加之部全備 一册

西洋綴紙數凡二百余ページ○定價四拾錢

豫約特別廉價廿貳錢

出版豫約申込來十九年一月廿五日
(豫約期後賣價三拾錢)至急三千部豫約來十九年一月廿日限歐羅巴以下來十九年二月
ヨリ着手

本書ハ方今江湖ニ流布セル直譯或ハ獨案內ノ譯字ニ番號ヲ附シタル迂遠繁雜ノ弊アル類ニ非ズシテ至便有益ノ方法ヲ以テ譯述シタル者ナレバ讀者ヲシテ英學獨修ノ便ヲ感ゼシムル夥多ナルベシト確信ス請フ英學篤志ノ諸彥一閱シテ此書ノ容易獨修ノ名ニ背カザルヲ知ル處アレ
御禮の爲廉價發賣

西村茂樹先生撰

新撰百人一首 一册

物彩色近古無双美本特別直引價九拾錢
黑摺(無彩色)美本特別直引價四拾五錢

右ハ先年出版以來愛顧諸彥ガ近古無双ノ美本トシテ陸續御購求被下數千部賣捌候ニ付御禮ノ爲本月廿日ヨリ來一月廿日迄前記非常ノ廉價ニテ賣捌候間御購求可被下候

東京本町二丁目
中外堂

千葉本町
立眞本舍

績文舍書籍掛敬白

弊舍ハ數十年來活版印刷と書籍出板とを兼業罷在り因て他店の書籍と雖とも御注文有之ときハ其店にて賣る價を(一割引ある品ハ其店の割引の通り)以て御取次仕候尤無手數料なり又女學叢誌御愛看諸君に限り東京府下千葉縣下出板書籍御購求上にて御尋有之節ハ郵劵二錢御遣わらば諸店問合の上懇切に御回答申上候也

東京々橋區南鍋町
貳丁目拾壹番地

發行所
東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
績文舍

持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 修正堂

同 神田區淡路町 巖々堂
同 神田區雉子町 團々社
同 日本橋區新葭町 長明堂
同 牛込肴町十七番地 活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目 高槻堂
同 本郷區本郷三丁目九番地 盛春堂倉田
大坂府備後町四丁目 岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目 立眞舍
上總國武射郡松尾 高林銀藏
江州彥根西內大工町 新々堂
勢州津京口町 郁文堂
陸前國仙台大町四丁目 木村文助

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY